

日中戦争 80 年・なぜ戦争は拡大したのか

山田 朗（明治大学）

I 日中戦争（1937-45）の原因

1 遠因：明治維新直後からの「脱亜入欧」の対外膨張政策

[1] 対ロシア戦略としての膨張・軍拡論の始まり（1870年代から）

→ 対ロシア戦略としての“朝鮮半島先取論” → 朝鮮半島への進出はじまる

[2] 「主権線」（国境線）を守るためには「利益線」を確保する、という考え方

明治政府指導者たちの基本的戦略発想

→ 朝鮮半島確保をねらう日清戦争（1894-95年）、台湾領有（植民地支配の始まり）

→ 中国を「非文明的」とみる中国蔑視観が定着

→ ロシアに備えるための日英同盟（1902年）：英米は日本を全面的に支援

[3] 日露戦争勝利による韓国併合

→ 朝鮮を「主権線」化、南満洲を新「利益線」に

→ 満洲をめぐる日米対立の始まり

朝鮮半島 → 南満洲 → 北満洲 → 華北 という日本の膨張の始まり

2 近因：第1次世界大戦（1914-18年）後の19世紀型の膨張・南進戦略の推進

[1] 中国本土への政治的・経済的進出（1915年「対華21カ条要求」）

[2] 1920年代後半：中国における民族主義、国家統一の動きを加速 → 国民政府による北伐へ

→ 日露戦争で獲得した権益を確保しようとする危機感 → 満蒙武力占領計画の始まり

→ 北伐阻止（山東出兵）と張作霖爆殺（1928年）

[3] 満州事変（1931年）と「満州国」建国

→ 関東軍・日本軍にとっての「成功事例」としての満洲事変

[4] 第二の「満州国」をねらう華北分離工作の活発化

→ 華北五省（河北・山東・山西・綏遠・チャハル）の国民政府からの“分離”を工作

→ 出先軍部（支那駐屯軍、関東軍）による既成事実の構築、政府による事後承認

II 日中戦争（1937-45）拡大の原因

1 原因(1)：目的なき戦争（目標の拡大）

[1] 盧溝橋事件（1937年7月7日）

→ 華北分離を狙って戦火を拡大させようとする動き（偶発的事件を「拡大」へと牽引）

[2] 華北分離から蒋介石政権の打倒へと目標の拡大 → 戦火、華中（上海・南京）へ拡大

→ 「対手とせず」声明（1938年1月）から「東亜新秩序」声明（11月）へ

→ 自ら交渉の道をとざしたため、軍事作戦によって決着をつけるしかなくなる

→ 蒋介石軍主力の撃滅をめざして奥地へと占領地を広げる（揚子江にそって西進）

2 原因(2)：「一撃論」（速戦即決論）の失敗

[1] 中国軍民の抗日意識（国共合作の成立）の高揚を軽視

[2] 満州事変・華北分離の「成功事例」により「押せば引込む」との考えが支配的

→ 中国・中国人は結束できない、という「支那通」の読みの誤り

3 原因(3): 欧米諸国の中国支援

- 泥沼化打開のために南進（援蔣ルート遮断、海上封鎖をねらう）
- 「援蔣ルート遮断」をめざして南進（のちに北部仏印まで踏み込む）
- 華中・華南に利権を有し、蔣政権を支援する英・米との対立激化（1939年）
- 日中戦争は、間接的に日本 vs 中・英・米の世界戦争に
- 日中戦争を終わらせるためには英を、さらには英を支援する米を抑えるという戦略に

4 日中戦争泥沼化の原因

- [1] 植民地・勢力圏を拡大しようとする明治以来の膨張主義的な発想
- [2] 軍部によって作られた既成事実の事後承認
- [3] 明確な目標のない戦争の継続（既成事実への執着 → 戦線の拡大の悪循環）
- [4] 泥沼化打開のためのさらなる悪循環
 - ・ 広大な占領地 → 膨大な兵力の投入 → 日本軍の質的低下 → 生物化学兵器の使用
 - ・ 日本軍の“現地調達”“自活”方針 → 略奪・虐殺の悪循環 → 三光作戦
 - 各地で繰り返された虐殺・虐待・略奪・性暴力 → 日中戦争が語られない最大の要因
 - ・ 軍事的決め手なし → 戦略爆撃（重慶などへの無差別爆撃）

Ⅲ アジア太平洋戦争（1941-45）の原因としての日中戦争

1 日中戦争から世界戦争へ

- [1] 独・伊（枢軸側）と組んで英・米の圧力を突破しようという動き
 - 「東亜新秩序」を「大東亜新秩序」（大東亜共栄圏）に拡大（1940年7月～）
 - 日中戦争解決のために独・伊（枢軸側）と組むという国家戦略
- [2] 三国同盟を締結し（1940年9月）、それを背景に武力南進（北部仏印進駐）へ

2 日中戦争の“成果”を失わないための対英米開戦

- [1] 対米交渉
 - 米側は日本軍の中国からの撤退を要求
- [2] 日中戦争の“成果”を失うぐらいならば対英米開戦を、という選択
 - 対英米戦争を遂行するためには南進（資源地帯の確保）が必要
 - 南進のためには対英米戦争を辞せずと決意（1941年7月2日御前会議決定）
 - 1941年7月：南部仏印進駐 → 8月：石油禁輸 → 早期開戦論の台頭（開戦不可避に）

おわりに：「自衛戦争」論の破綻

明治時代以来の大陸への膨張政策が日中戦争を生み、日中戦争による日本軍の侵略（南進）と欧州大戦に便乗した三国同盟が対英米戦争を不可避とした。

【参考文献】

- [1] 山田朗編『外交資料・近代日本の膨張と侵略』（新日本出版社、1997年）
- [2] 宮地正人監修・大日方純夫ほか『日本近現代史を読む』（新日本出版社、2009年）
- [2] 山田朗『昭和天皇の戦争』（岩波書店、2017年）